

平成二十六年(2014)
ふくやま芸術文化ホール

第五十六回

広島県高校演劇大会劇評

洲浜昌三



平成26年度 広島県高校演劇大会(福山リーデンローズ)

- | | | |
|--------------|------------------------|--------------------|
| 1. 福山明王台高校 | 「祭りよ、今宵だけは哀しげに」 | 加藤純・清水洋史 作 |
| 2. 比治山女子高 | 「恐怖のズンドコ」 | 柳本博 作 土井一生潤色 |
| 3. 福山中・高等学校 | 「止まった針を」 | 林 名央 作 |
| 4. 広島観音高校 | 「ミサンガ」 | 森井あや香 作 |
| 5. 清水ヶ丘高校 | 「梅入りおにぎりはいかが」 | 岡田隆一 作 |
| 6. 鈴峰女子高校 | 「夏の夜の…」 | 畠山真代 作 |
| 7. 尾道北高校 | 「KTK2014」 | 尾道北高演劇部 作 |
| 8. 舟入高校 | 「広島戦災孤児養成所『童心寺物語』」 | 吉本直志郎 原作 須崎幸彦構成・潤色 |
| 9. 基町高校 | 「うつつうらしまー浦島子・高橋虫麻呂異聞ー」 | 松本誠司 作 |
| 10. 尾道中・高等学校 | 「急須で淹れた紅茶」 | コダルマ・ゴロウ 作 中村春菜 潤色 |
| 11. 呉三津田高校 | 「銀河旋律」 | 成井豊 作 |
| 12. 沼田高校 | 「はないちもんめ」 | 黒瀬貴之 作 |
| 13. 福山中・高等学校 | 「僕のばあちゃん」 | 新宮正一 作 |

講師審査は長田佳代子先生(舞台美術家)、洲浜昌三(劇研「空」代表、全国高演協顧問)審査員は広島県の演劇部顧問の先生3名、計5名。代表校は舟入高校、沼田高校。中国大会は12月20、21日松江の県民会館で開催。島根は出雲、松江工業、安来高校が出場。岡山では岡山工業高校が出場しますが、顧問の森脇健先生は大田高校の元演劇部員で、劇研「空」の劇を手伝ってもらったことがあります。この冊子は、閉会式での講評を少し詳しく劇評として書き、求めに従って、事務局(舟入高校・須崎幸彦先生)へ提出、各上演校へ送られた原稿をまとめたものです、参考になれば幸いです。誤字等は判読ください。文中の写真は遠景撮影という条件で担当者の許可を得ました。

① 福山明王台高校 「祭りよ、今宵だけは哀しげに」

加藤純・清水洋史 作

脚本について：

宮沢賢治の「銀河鉄道」を基にした脚本で、よく上演される。おもしろい脚本だが、暗示性や象徴性がとても強く、劇として具体的に舞台上で上演する場合はとても難しい。しっかりと脚本分析をして、ストーリー展開や人物関係、いろいろな意味に解釈できる言葉の意味などを共通理解しておかないと、劇が宙ぶらりんになり、観客には「何を言いたいのか」わからない劇になりかねない。

例えば、最初の場面は劇全体ではどういう位置づけなのか、ラストの場面との関係は？銀河鉄道とは何なのか。死んだカンパネルラと一緒に汽車に乗っているのはなぜか？銀河鉄道の場面は何を表しているのか、等々。脚本分析が不十分だった（と思える）ので、劇全体を通して、「何を言いたかったのか」十分伝わって来なかった。その最も大きな原因は、二場の銀河鉄道の場面の装置や照明が一場とほぼ同じで、「宇宙を走る汽車」というイメージが出ていかなかったことにある。

舞台装置、照明、演技、テーマなどについて：

中幕を思い切ってせめて、両側え黒色の衝立を立て、舞台には箱を六個置いた舞台だったのが、特にI場ではそれを象徴し表しているかわからない。脚本には「祭りの夜。満天の星。虫の声。町はずれを流れる運河の脇。薄暗がりの中に、古めかしい水門が見える」と指定してあるが、なにか都合のわるいことでもあったのか、ほとんど省略され、箱が六個置いてあるだけだったので装置からは場や風景が想像できなかつた。箱は二場で、汽車の座席に使う箱だったと思えるが、一場では意味不明の存在だった。かえってI場では六つの箱がない方が、台詞だけで観客の想像が働

いて、風景が浮かんでくる。二場のはじまりで、汽車の汽笛が大きく響き渡り、とても雰囲気を感じていたし、場面の切り替えの効果も十分あった。残念なのは汽笛が鳴っても、場面も照明もほとんど変化しなかった。広大な宇宙を走る汽車だということを表したかった。ホリゾント幕に空の色は使いたかったし、欲をいえば無数の星もほしかった。照明も汽車の中だけに当て、範囲をせばめたかった。照明の当たる範囲が広すぎて、汽車の中というイメージが浮かばなかった。汽車の中の座席だから、六つの箱も座席の様に置きたかった。

演技などには大きな問題はなく、みなさんがそれぞれの役をよく演じていた。装置と照明にもっと工夫があったら、劇の深さや広がり生まれ、メリハリができて、もっとわかりやすくなり、ジョバンニの言葉、「一番の幸せはぼくがここにいることだ」という台詞がもっと生きてきたと思われる。（撮影できず写真なし）

② 比治山女子高 「恐怖のズンドコ」柳本博作

土井一生潤色

脚本について：

男性が中心の脚本を、女性中心にしたために、大幅な台詞の変更になった。台詞は七割くらい変更されていたと思える。笑いを取るための皮相的な台詞も多いドタバタ調の劇だが、舞台ではどうなるか、単なるドタバタか、ドタバタの中から何か出てくるか、あまり期待せずに本番の幕開きを待った。



緞帳が上がると、強烈なパワーが舞台からあふれてきて、観客の意識を舞台へ引きつけた。何が始まるんだ！という興味がわき上がり、最後までテンポのいい工夫された舞台が展開され、楽しく観ることができた。前半は笑いのための展開の感じが強く、面白く観ながらも、何か空疎な感じがあったが、半ばからはストーリー展開とよく噛み合って舞台が進んだので、とても充実した舞台になった。

舞台装置、照明、演技、小道具、テンポ、創意工夫など：

よかった点をメモから箇条書きに挙げてみたい。

- ・みんなが思いきって演じているので、パワーがありすっきりして気持ちがいい。
- ・劇のテンポがいい。
- ・舞台装置が単なる飾りでなく、劇のなかでよく生かされている。プロレスリングの特設リンクでの演技やサイレントモーションなどは、前面の劇の進行と同時に展開され、劇に奥深さが生まれ重層的で印象的な表現になり、感心した。ホリゾントの色も工夫されていて場面によく合っていた。
- ・部員が議論しながら創意工夫して劇を作っていたことがあちこちに伺えた。

例えば、黒板の張り紙によって、その場面が何の場面かわかるようにしたり、歌と踊りで立候補の抱負や提案を表したり、面をかぶって画用紙の絵をめくりながら提案したり、背後で座っている人たちの演技や表情が生きていたために、立候補者の説明が立体的になってよく分かった、観客の声援による参加を計算して演出したり・・・あちこちに部員たちの創意工夫が生きていた。

荒唐無稽ともいえる面白いドタバタ劇で、その中から出てくるものを楽しみにしていた。場面としてはラストもおもしろかったが、飛びだしてくる中身として「普通」か「やや期待はずれ」だ

った。しかし楽しく観たことは間違いないから、劇全体としては、「期待以上」だった。

③ 福山中・高等学校「止まった針を」 林 名央 作

脚本について：

問題のある他人（従兄弟の子どもだが）の子を家族として受け入れるーという難しい現代的なテーマに真正面から向かいあって書いた脚本で、その問題意識と挑戦は高く評価したい。受け入れる家族の子どもたち（長女、次女、長男）と結衣との関係を主体にして心の交流を描いている点に若者らしい新鮮さと特徴がある。ストーリーには以外性や意表をつくものはなく、素朴で自然で、ドラマとしての葛藤や対立が弱く、やや情緒的な解決に説得力が欠ける恨みがある。

脚本を書いた林さんは中学2年生だという。脚本を読んだ段階では、そのことはわからず、高校生の創作だろうと思って読んだ。



装置と演技、会話、発声、演出、音楽など：

パネルを使って部屋をつくり、入り口も正面と上手に二カ所、カーテン、壁の色などに工夫があった。台所と部屋の間にはカウンター、部屋にはテーブルと椅子。部屋の外の下手にはグレイの壁があり、外での会話場面に使用。よく考えて大きな舞台装置が作られていた。カウンターを設けたことによって、料理をする人の姿が見え、会話するときには正面に向かって喋ることができるので、声がよく聞こえていい。工夫が劇で生かされている。

テーブルを囲んで会話する場面が大変多くて声が聞こえにくく、劇がテーブルの周辺で収まる傾向が強かった。観客へ聞かせる、観客へ訴える、観客へ見せる、という演出や演技がほしい。お母さんは何となく温かい味があつてよかつた。全体にもつと思ひ切つて演じ、山場ではドラマとしての対立をはっきり出して演出すれば、ラストの心の通い合いも感動的になつたと思う。

キャストは全員中学生だつた。無理なく自然に動き喋つていたが、動きや台詞で少し遠慮している気がした。10のうち、9の力で演じた印象。成長途上にあること、部活動の時間、舞台上の緊張などさまざまなことがあり、高校生と同じ基準では論じられないかもしれない。とはいえ、高校生の劇の中にいれても、大きな遜色はない舞台だつたことは間違いない。

音楽…暗転時に使われていた静かな曲は劇に奥行きと落ち着きを生み出した。いい選曲だつた。

④ 広島観音高校 「ミサンガ」

森井あや香 作

脚本：

高校生の進路をテーマにして、おもしろおかしく戯画化して描き(特に前半)、テンポのいい温かみのある劇に仕上げている。ラストの視点の展開(梓が、夢であつたアフリカの現地からの声)も効果的で、子ども時代、高校時代の夢や進路への悩みが一幅の風景のように一気に浮かび上がり、夢と現実、友情



などがさわやかに舞台から伝わってくる。いい脚本。どの程度戯画化して演じるかという問題は残るだろう。笑わせることを狙つて戯画化すると、この劇が少し薄っぺらになる。

装置、場面、演技など…

緞帳が上がると、パネルを立てた教室の場面が上手に浮かぶ。教室の上手に黒板があり、その上にクラスの目標が墨書して張り出されている。その前に教卓。部屋の中央に出入り口、部屋には椅子など数脚。教室の外には、下手の袖幕から平台に一枚くらいの長さの台が設けてある。

いい装置だな、と思つて劇を見はじめ。進路相談にのつている男の先生も若々しく誠実そうで、うまく演じている。進路相談を受ける人の女性たちは、ちょっと戯画化し過ぎではないかと思つるところもあるが、思ひ切つて演じていて楽しい。

場面は次々と変わつていった。教室から、三人の子ども時代、バス停前の会話、杉山先生の部屋、母と会話している自宅…それぞれの場面が何回も入れ替わつて出てくる。バス停場面は教室の前、その他の場面は下手の台の上等々。その結果劇の流れが途切れ、劇がこま切れになつた。特に舞台下手で演じる場面が多く、そこで演じる劇は、片隅で演じているという印象がどうしても残る。

メモにはこう書いている。「場面をたくさん作り、片隅で演じることによつて、脚本の持つ良さがマイナスになつた。途中から細切れになつた」

どうすればいいのか?この劇で何を一番観客へ訴えたいのか、という視点で装置を考える必要がある。教室の場面が一番大切なら、今回の装置でいい。しかし教室を全面に出せば、他の場面は片隅に追いやられる。教室をそのままにして、その中で回想場面を作る方法もある。部員同士で激論すれば必ずいいアイデアが出てくる。そこに高校演劇の魅力もある。

冒頭にも書いたように、ラストの梓の声は劇全体を俯瞰させ統一感を与え、夢と現実、友情を浮かび上がらせてくれたと思う。主人公の梓について―何故突拍子もない言動をするのか。その内面を支えるものが不足している。面白おかしく表現することが先にあつて、人物の内面がやや希薄になった。

創作について…脚本を書くとき一番楽なのは、次々と場面を変えて書くことです。その結果、暗転や明転や語りによる繋ぎがやたらと多くなります。しかし劇にすると統一感がなくなり、細切れになり装置作成に困ります。高校生が書くとき一番陥りやすい落とし穴です。脚本に暗転が多すぎたら、演出するとき、場面転換など減らすように工夫する必要があります。

⑤ 清水ヶ丘高校 「梅入りおにぎりはいかが」

岡田隆一 作

脚本について…

Okada world 健在なり！今まで八回広島県大会を観る機会があり、毎回観劇した。高校生だけの世界ではなく、移り行く時代と広い社会の中で家族や高校生の姿をじっくり描いている。厳しい対立はあるのだが、温かい思いで舞台を閉じるのもOkada world の特徴である。どうしても会話劇になり状況説明が多くなる。この脚本も三分の一くらい（13ページ）劇が進んでからテーマが立ち上がってくる。

舞台装置、小道具、演技、人物、展開な



どろろい…

緞帳が上がったときに最初に目にする舞台装置に感心した。手を抜かず丁寧に、細かいところまで神経を使って日本間が作られている。中幕で広い舞台をせめ、さらに上手と下手に黒い衝立を立てて部屋をコンパクトに作っている。壁の配色や高さの変化、正面からの出入り口の工夫、仏壇、各種置物など、とてもよく出来ていた。

部屋の衝立があるお陰で、声も客席によく届いた。（このホールは二人入る大ホールで残響音が、秒もあり、台詞がとても聞きにくい。滑舌が悪い場合には、余計言葉が分からない）

仏壇が実物のように作られていたが、単なる飾りではなく、先祖代々受け継いだものを守る為にこの家を残したい直美が、売り飛ばしたい姉と衝突し、黙って仏前で手を合わせる場面などで、劇のテーマと結びついて、うまく使われていた。部屋の小道具もよく考えて置かれていた。

嫌な思い出しかない姉が、声を荒立てて家具などを投げつける場面から劇は一気に引き締まった。嫌なことしかないから家を売りたいと言っていた姉が、負債を返すために競売にかけてすでに成立していると白状する。これはどんでん返しを狙ったものだと思うが、もっと早い段階で、この重大な問題をぶつけたら、劇が緊迫し面白くなったのではないかと思う。すでに売っているのだから、隠す理由はないはずだ。ストーリーを描くよりも、対立を掘り下げ発展させて行く方がドラマとしては緊迫感や迫力、深味が生まれる。井戸を深く掘ればいろいろな地層に出会う。横に広げたら同じ地層で散漫になる。

ラストでは、長女の彩が、母がよく作ってくれた「我が家伝統のおむすび」を作り、味わう場面で、緞帳が下りる。うまくまとまり、終わった、という雰囲気は出てくるが、何も解決していない

いの、情緒的にうまくまとめ終わった、という印象が残る。
終わり方は難しい。題が「梅入りおにぎりはいかが」だから、この終わり方でいい、と思う人も当然いると思う。

⑥ 鈴峰女子高校 「夏の夜の…」 畠山真代 作

脚本について…

それぞれの人物の台詞がとても短かく、どんなテンポの劇になるのだろうと考えた。また、場所や時の設定も具体的に書かれていない箇所が多く、脚本を読むだけでは場が分かりにくい。そしてプロローグやエピローグを含めると12場で構成されている。一時間の劇で12場という数は、場の転換がとても多く、劇が細切れになる恐れがある。更に、作者が一番訴えたいのは、認知症がある80歳のおばあちゃんが、溺死した孫の真子へ抱く罪意識の問題なのか、おばあちゃんと愛美との関係がテーマなのか、夢をなくした冴希の成長物語なのか、などいろいろ考えた。

脚本だけでは本番の舞台が想像しにくかったが、いつもの演技のうまさまで台本を見事に生かした舞台になるだろう、と想像した。



舞台装置、転換、発声、演技などについて…

舞台装置は上手に神社の鳥居が設置され、舞台の奥に土手（下手にいくほど段があつて少し高くなる）があり、土手の前に2、3段くらいの石段が2ヶ所、ベンチが2脚置かれている。劇の冒頭で、冴希が行方不明になった中川さんを探して、花道からこの舞台へきて、ここで中川さんを発見する。鳥居のあるこの場所は、

中川さんを発見した場所だということが観客にインプットされる。土手の上で展開される劇は、特定の場所ではなく、様々な場面に使われていて問題はないが、鳥居の前やベンチの前は特定の場所だと観客は思ってしまうので、その場所がいろいろな場面に使われると（照明でうまく区別すれば問題ないが）、混乱して分かりにくくなる。その点が最も気になった。

発声や滑舌はとてもよくて、大きなホールだが言葉がよく届いた。これは鈴峰女子の大きな特徴であり伝統だと思った。

テーマについて…

「夢を失った冴希の成長物語」ではないかと、審査室の会話である先生が言われた。そういう見方もできるかも知れないが、それにしても、冴希の心情や変化が一貫して描かれていない。ぼくは、溺死させてしまった孫の真木への罪意識や贖罪意識が、認知症になっても深層意識に深く巣くっている悲劇として、さらにそれを盆踊りで浄化していく救いの物語として受け取った。

そういう点ではラストの盆踊りのシルエットのシーンはテーマを象徴して見事だった。前半は少しごちゃごちゃして分かりにくいところもあるので、テーマに沿って整理すれば、もっと心に響く劇になったのではないかと思う。

テーマの定義には問題もあるが、「時間の劇では、訴えたいことはついに絞り、あらゆる場面や出来事がせせらぎや小川のように、その大河に流れていく、という骨太い構造を持っていないと、劇がわかりにくく散漫になる。暗転が多くても、骨太い筋が底流としてあれば、観客は細切れ意識なしに劇に没入する。せせらぎや小川が写すきて、それがいつの間にか大河かの如く流れていって混乱する。」

⑦ 尾道北高校 FTK2014J

尾道北高演劇部 作



脚本について..

短い台詞でテンポよく劇が展開されていき、会話にも変化があつてとてもおもしろい。思わぬどんでん返しもよく考えられていて、よく書けている。このままでもいいのだが、欲を言えば、ドラマとしてのぶつかり合いが少し弱い。ハッピーエンドで締めくりたい（それはそれでいいのだが）という意識からか、後半の部長さんを学校へ行かそうとする作戦から少し劇が甘くなった。解決しなくても、みんなが一生懸命努力している姿を観客に見せるだけでも作者が狙ったテーマは十分伝わるのではないだろうか。そういう欲張りな注文があるにしても、よく書かれた脚本だと思つた。

舞台装置、発声、演技、創作、テーマなどについて:

舞台装置は、上手にベンチ、下手側に2段になった台だけでとてもシンプル。シンプルで特別なメッセージを発するものがなく無機質だから、あらゆる場面に自由に使える。その点ではバランスよく配置された舞台で、劇の表現にもよく合っていた。

劇のテンポがとてもよく、動きもきびきびとしていて、全員の声もよく通り、すっきりとした楽しい舞台だった。特に阿部健太郎は走り回ってよく動き声も大きくて劇を引き締め楽しくしていた。

主人公の神谷祥子は冒頭から、何かありそうだと予感させるものがあったが、明るく伸び伸びと演じたので、すぐに疑念を忘れて観たが、後半の不登校だったという大逆転を前半でもよく生か

していた。

客席の大きな笑声も何度もあり、劇にはいりこんでいた。ストリーリーの組み立ても骨太で明快だったので、テーマは十分伝わってきた。最後まで飽きずに楽しく観劇した。

欲を言えば、冒頭にも書いたように、作戦が功を奏して、不登校だった神谷祥子が、めでたく学校へ行きはじめ、明るくハッピーエンドで終わる（悪いとはいえないが）ところは、気持ちいいが、安易で、神谷祥子も作者や演出の操り人形だったね、という印象が残る。

ラストのシュプレヒコールは、すっきりして気持はいいが、今までの劇が何かの宣伝かキャンペーン（こうしたら不登校はなくなりますよ！みたいな）だったかのように浮き上がって、逆効果だった。

劇にカタリシスは必要だが、説明や押しつけは逆効果になる場合が多い。説明は文学作品の敵だ。

劇のラストについて..

創作する時、劇のラストは難しい。ラストによってそれまでの劇が更に生きたり、逆にしぼんだりしかねない。しかし、最後は「きれいに」「気持ちよく」「プラス志向で」「建設的に」「ハッピーエンドで」などと無理に考えるより、どのような終わり方をしたら、「お客さんの心に響く」「観客の理想を深め広げる」ことができるか「劇のテーマを象徴的に暗示することができるか」という方向で考えたほうが、それまでの劇が生きてくる。芸術に力つりシスは重要だが、現代劇はリアリティを重視する。劇中のラストだけが問題を情緒的に解決するつもりでアリテイが消え、嘘っぽくなる。

⑧ 舟入高校 「広島戦災孤児養成所『童心寺物語』」

吉本直志郎 原作

須崎幸彦構成・潤色

脚本について..

原爆投下後の広島でたくましく生きている原爆孤児たちの姿を描いている。事実や史実に基づいた確かさや、実際に近い広島弁を使って書かれ、リアリティがある。劇は、語り手によって二回、劇の作成意図や状況が説明される。全体は多くの場によって構成されているが、大きく分けると三つのパートになる。

①原爆投下後の十二月ごろ。広島駅前の無料休憩所を中心に孤児たちのたくましい姿。
②戦災孤児収容所「童心寺」ができ、そこを抜け出して町へ出ていろいろな経験をする。千円札拾い、福屋デパート、原爆で二人だけになったうどんやの老夫妻との出会いなど。
③短い場面だが、幸太と恵子の淡い恋。希望。

それぞれの場面は緻密な会話でテンポよく展開されるが、数多い場面が細切れにならずに流れていくか。三つのパートが孤立せず一つの物語として成立するか。どんな装置になるか。語り手は必要か。ラストは付け焼き刃にならないか。事前に脚本を読んだとき、このようなことを考えた。

舞台装置、照明、発声、表現、衣装、テーマなど..

コンパクトな舞台の構成がこの劇を**拡散せずに凝縮させた**といえる。中幕を思い切つてせめて、舞台中央に台を組んで、その上に手作りの箱を数個置いた。この箱は動かしたり、別の面を見せ



ることによって、照明と相まって、それぞれの場を表すために効果的に使われた。

発声もしつかりしていて言葉がよくわかった。みんなよく動いて劇の動的な面と、静的な場面とのメリハリが生きていた。一場(①)は原爆孤児のたくましさを中心にして書かれ、演出されていたので、どちらかというと孤児の群衆という印象が強が残った。「元気でたくましい」姿はよく出ていたが、同時に、家族を失いしょんぼりとした面も出すと、もっと深さが出たのではないか。うどんやのおじいさんおばあさんの場面はこの劇では重要なエピソードで印象に残る。人数が足りなくて何役も兼ねながら、よくここまでやったね、と認めつつも、おじいさんおばあさんは若すぎて高校生の素が見えた。衣装もメイクも動作ももつと観察して役をつくりたい。

前半より後半の舞台がしつくりとして引き締まっていた。それはパート①のようにたくさんのエピソードや動きが次々と出てこなかったからだろう。ラストは場面としてはいいが、ちよつと付け焼き刃の印象も残った。というのは、①②を通して恵子さんはほとんど出てこないし、幸太との関係も暗示されていないからである。ラストに近い場面、弟の和彦がズック盗まれ姉の恵子のズックを履き投げ飛ばすところがあるが、その場面自体はいいにしても、ここへ回想として挿入すると前後の流れの関係から唐突感がある。

①②③を通して、「**背後を一貫して流れる骨太いもの**」が欲しい。
①と②を何故一時間の短い劇に合体させたのか。①の一部を取り入れて、②を中心に、恵子も幸大も登場させて構成し③でエンドにしたらまとまった物語ができる。そのとき語り手の説明は不要になる。(あくまで参考まで)

⑨ 基町高校

「うつづうらしまー浦島子・高橋虫麻呂異聞」

松本誠司 作

脚本について…

文学性の高い脚本である。それは扱った素材が古典であるという点だけでなく、劇全体の表現が象徴的で、それぞれの台詞のキーワードも、**多義性を持ち象徴的で、考えさせる**、という意図から作られているからである。

今までも数回、松本作品は読み、観劇した。もっと観客にサービスマンしていいのに、いつも思うが、作者は妥協しない。(例えば、「たまくしげ」ではなく「玉手箱」を使えば、万人にわかるが、原文は「たまくしげ」だから作者はそれを尊重する)しかし今回の作品は、それほど難解というわけではない。それぞれの場面が具体的な場で構成されているし、ストーリーも複雑ではなく、一貫している。しかし会話だけで進むところも多く、大切な言葉をうっかり見落とせば、全体がわからなくなる可能性もある。

舞台装置、照明、音響、発声、テーマなど…

幕開きのシーンは美事だった。強烈な雷の音と強風、ホリゾンに荒波。その中を姫を小舟に乗せた船頭が揺れながら艀を漕いでいる。船頭と姫と舟だけが照明に浮かび上がる。狂言の一場面をみているような気がした。やがて龍が登場するが、とても良くできていて操り方もうまかった。

舞台装置は上手に高低のある台を組み、下手にも台を組み合わせて置いたシンプルなものだったが、バランスも良く、この劇で表現するためには邪魔にならず、多様に使われてよかったと思う。発声もよくて言葉も良く伝わってきた。

ストーリーの構成は、演劇部員が議論して劇をつくりあげ日常

の部活動と、それを発表する稽古場面をはさみながら進行していく。転校する噂があるユメジが主役の浦島子を演じ、台詞も自分で考えることになっている。最後の台詞をどういうか。この学校に残ることを暗示するか、転校を暗示するか。それはた「まくしげ」を開けるか開けないかの選択にかかっている。部長のナツミはユメジ君に好意を寄せているらしい(はつきりとは書かれていない)

劇の前半では主に高橋虫麻呂や月子姫、常世姫、短歌などの紹介や説明などが主流となったので、劇がちよつともたついた。劇中劇は、もうすこし一貫した骨太い流れが背後にあれば、説明的な解説は不要だったと思う。何回か出てくる**劇中劇の連続性**が弱かったのではないだろうか。

ラストでナツミが一人舞台上に立つて虚空を見つめ、「ユツメジ。がんばれ」という。ユメジは、原爆の落ちた広島から、原発事故があつた福島へ帰っていったのだろう(確証はないがそう推測できる)。

ぼくにはこのラストの台詞は、重々しく、切なく伝わって来た。厳し現実と立ち向かうユメジの生き方、好きだった人との別れ・・。ひと言に大きな意味や思いを込める台詞は、誰にも書けるものではない。観客にどれだけ伝わったかはわからない。大切な台詞を聞き逃がしていたら、何のことかわからないだろう。分岐点はここら辺にあるにちがいない。(写真がありません残念)

⑩ 尾道中・高等学校 「急須で淹れた紅茶」

コダルマ・ゴロウ 作 中村春菜 潤色

脚本について…

高校生向けに書かれた脚本ではなく、アマチュア演劇、セミ

プロ演劇向けに書かれた脚本だと思う。もちろん社会人向けの脚本や、プロ向けの脚本を上演してもかまわない。しかし著作権や使用料、せりふの変更、上演時間の問題があり安易に飛びつくわけにはいかない。また**テーマが高校生の意識とかけ離れている場合**も多い。この劇は尾道で何回か上演されているので、その点で脚本家の理解があつたのだろう。

初めて観ると、テンポのいい展開、面白おかしく笑いを誘う台詞。笑つて観ていると、次々と起こるどんでん返しに驚かされ、最後に情報管理社会の恐怖を味わう、という構造に豊潤な劇を観た満足感を味わう（役者がうまければの話だが）。しかし仕掛けがわかつて二度目に観る時には、どんでん返しの驚きはないし、ラストの恐怖も想定内。そうなれば、役者のうまさを楽しむのがメインになる。

仕掛け中心の脚本の宿命ともいえる。

舞台装置と照明が高校演劇としては飛び抜けて豪華で工夫が行き届いていた。舞台にメートル以上あるスタンド付きの照明器具を、台使用し、場面が変わると、その照明器具を移動して使用していた。初めて見た使用法だったが、とても便利だし効果的に光を当てることができる。

最初の家族ごっこをする場面では、面白さはよく伝わってきた。しかし、何となくどこちなさがそれぞれの役によつて微妙に出てきて、観客にそれとなく微妙な違和感として残さないと、真面目に家族ごっこをしている意義が伝わらない。うまく演じればうますぎて違和感がある、という役の人もあつていいだろう。みんなが当たり前のようにうまく演じていたら、劇の陰影が消えてしまう。

家族ごっこを観察している研究者の場面では鬼頭と稲葉の会話



中心で進む。猛烈な早口で喋るが、分かりにくい。おかしいのだが、笑うほどでもない。中身はほとんどない会話なので、そのうち慣れて聞き流している。こういう会話（他人の噂やゴシップ等々）は社会人では面白いのかも知れないが、高校生の意識のレベルでは関係ないし、しかも長い。観客を引っ張っていくのは大変だ。動き回って喋っていたが、それもパターンになると底が見える。良くがんばっていたが、無理がある。

家族ごっこをする人たち、それを観察する研究者、それをリストラするためには観察している女研究者……。それを観察している人は……。出てこなかったが、ここに恐ろしさがあると思える。

ラストは全員が中央に集まり固まりになって観客を見つめて緘帳が下りた。何を狙ったか。その狙いが狙い通りに観客へ伝わったか。意外性は伝わったかもしれないが、意図とは別なものが届いたのではないか、という気がする。熱演を高く評価しながら、「慣れすぎたうまさ」も感じた。

⑩ 呉三津田高校 「銀河旋律」 成井豊 作

脚本について：

プロの劇団、「キャラメルボックス」が上演した劇で、成井豊作品はブームといわれた時期があつた。会話中心の脚本で、ユーモアもあり面白く、舞台装置の指定もなく、上演時間も1時間を目途に書かれているので、高校演劇でもよく上演される。会話中心の劇だが、発声や表現力が求められことや、照明や装置に指定はないが、数多い場面や時間の変化を、どのように舞台上で表現するか、創意工夫が必要である。

劇は、現実にはあり得ない荒唐無稽なストーリーで成り立っている。嘘から出た真実。何が出てくるか。そのために条件や約束が設定される。「他人によって記憶が改変される」「改変される前の記憶は一時間しか残らない」「柿本は3年前の九月のはるかに会いに行く。1千万円では2ヶ月前にしか行けない。はるかが結婚する一年前の3月なら、1千万円で45分間過去へ滞在できる」この条件を厳格に守ろうと奔走し苦闘することで、劇の緊迫感が生まれ、愛を貫くクライマックスへ高まっていく。観客に分かるように、どのように数多い場面を設定し、ラストの感動へ展開していくか、期待しながら脚本を読んだ。

舞台装置、照明、音響、発声、テーマなど：

舞台装置は何もなかった。これは思い切った選択だったに違いない。照明も特別な使い方はなかった。素舞台で演じるといふことは、台詞と身体表現を中心にして劇をつくることになる。全般的に発声や滑舌はよかった。ニュースキャスターも健闘していたが、TVで日頃からプロに接しているの、そのイメージからすれば、一段の努力が必要。

残響音2秒という劇にはハンディキャップが大きいホールで、声は聞こえても言葉がわかりにくいという劇もあったが、力まずに言葉がよく届いた点は評価したい。

2人のニュースキャスターの位置は下手の花道だった。数多い場の展開が必要なので、花道を使えば、他の場面がスムーズに展開出来るのは間違いない。しかし、この劇ではニュースキャスターは重要である。舞台中央で颯爽とスマートに全国へニュースを伝えたい。全国放送中に、私的なことを話したり、突然記憶変更の攻撃を受けることに、おもしろさがある。装置がわりなら、照明で浮かび上がらせてもいい。花道で演じればどうしても「片隅扱い」になる。

観客に理解させるために難しいところは、柿本が（タイムマシン

ンで）過去の世界へさかのぼったり、現在の世界へもどったりする場面である。台詞だけでは、分らない観客が多いに違いない。工夫したいところだ。音響や照明を十分に生かして表現したいところだが、台詞で流してしまった気がする。

奈良時代の歌はこの劇でテーマにも底通する重要な雰囲気を生み出している。もつと優雅な歌や舞踊を生かしたかった。ラストシーンは感動的だった。緞帳という壁を突き破って、柿本とはるかの愛が結ばれる。演劇は虚構である。「嘘から出た誠」。『作事から感動が生まれた』。(写真がありません)

⑫ 沼田高校 「はないちもんめ」 黒瀬貴之 作

脚本について：

脚本を最初に読んだ時の感想を次のようにメモしている。「被爆した祖母、被爆二世の母、三世の葉月。三世代に渡る被爆の問題を、うまく構成して展開し、まとまった物語になっている」。

クラスのみんなが建物疎開作業中に被爆して死ぬ。東京から転校してきて仲がよかった亜紀の骨は今も分らない。祖母の縁はその朝、たまたま病気で倒れて欠席し、1人生き残った。その祖母は今、床に伏していて死期が近い。看病しながら、葉月はバスケットの練習に励む。

ルパン三世などからかわれ、レギュラーから外されて自信を失う。葉月の悩みと祖母の回想などを挟み、「はないちもんめ」が10回以上出てきて、厳しい現実がやや情緒的に展開される。脚本を読むだけでは、歌はどのように歌われ、照明、装置がどのように



なるかは分からない。今までの沼田高校の舞台を重ねて、想像しながら読んだ。

舞台装置、音響、衣装、発声、コロス、テーマなど…

緞帳が上がると、「花いちもんめ」がきれいなコーラスで流れてくる。舞台中央に30人くらいのジャージの集団が照明で浮かび上がり、歌いながら舞台前方へゆっくり動いてくる。印象的な幕開きだった。コロスの歌がおわると、緑と友達の掛け合いがあり、「みどりちゃんはいーらない」と囁す。この裏の意味はラストに分かる仕掛けになっているが、気がつかなかった人もいるに違いない。

意外だったのは舞台には何もなかったこと、コロスは全員ジャージ、劇を進める人物もほとんどがジャージだったことだった。**大きな冒険、実験、挑戦**だった。賛否両論があったに違いない。大勢の部員に、それぞれやり甲斐がある役をつくることは、最も重要なことである。部活動には人間教育という大きな目的がある。部員は、少なすぎても多すぎても、劇作りには困難が生じる。40人以上の部員を登場させ、動きや歌など、見事なコロスを演じたことは大いに評価したい。

装置が何もないと、**水平な動きだけ**になる。病気で寝ている祖母もジャージでフロアーに横たわることになる。フロアーに寝ると客席からは顔は見えない。見えてもジャージ姿では死期に近い老婆のイメージは浮かばない。一瞬、倒れているバスケット部員を連想した。

「花いちもんめ」が長短合わせて10回以上歌われる。何の効果を狙っているのか分からない場合もある。歌も、ギターだったりピアノだったり声だったりハミングだったり、編曲してあったり、多様な使い方な方がいいが、同じ歌でコロスの合唱が多用されると重々しくなり、くどい印象を受ける。この歌は、花を売り買ひするのどかな歌として、一般的には通用しているが、飢饉で「子

どもを売買する」歌という説もある。この劇では両方で使われていて複雑である。30人以上のコロスが全面にでると、骨である劇の展開に重圧がかかり、主流となるストーリーの印象が弱くなる。**コロスはもともと影の存在として劇を支えるべきだ**と思う。脚本を読んだ時の印象と実際に観た舞台に落差があった。コロス、装置、衣装のことは脚本ではまったく分からず、想像で読むしかなかったからである。

⑬ 福山中・高等学校 「僕のばあちゃん」 新宮正一作

脚本について…

現代の切実な高齢者と家族の問題が、ていねいに辛抱強く、リアルに描かれていて迫力がある。解決や光が見えない問題であるが、真正面から向かい合って劇にした誠実な姿勢が脚本の背後を支えていて好感が持てる。



人物は家族だけではなく、近所の主婦や子ども、叔父や叔母なども登場し、更に昔は大きな縫製工場があり村も賑わったことを示すなど、家庭内だけの狭い世界ではなく、社会的な広がりが出ていてよかった。せりふが生活語（広島弁）で書かれたのもリアリティがあった。夫の孝一の言動に存在感があり、劇で占める比重も大きかったために、劇全体がやや古めかしい印象を与えた。題は「僕のばあちゃん」だったので、**若い高校生の「僕」の視点**がもつと出れば、新しい風が吹いたかもしれない。九千坊ではじまり、山場がしつかりと書かれ、最後は九千坊の祠に祈る場面で劇はおわる。うまくまとまって安定感はあるが、小さい世界に情緒的にうまく納めたという

印象がのこる。

舞台装置、発声、表現、演技、テーマなど：

緞帳が上がると、農家の庭と縁側のある居間が見えてくる。居間の上手には屋根があり出入りできる戸口がある。家の全体が少し斜めに設置され、下手の庭が広くなっていて、低木が見え九千坊の祠がある。細かいところも手抜きがなく、壁や部屋の色合いも農家として自然。とてもよくできていた。

言葉もよく伝わり、表現も力まずに自然。おばあちゃんも無理がなく自然でよかった。対立場面も緊迫感がでていて観客を引きつけた。

全体に大きな問題はなかったが、**観客に向かって劇を見せて演じるという姿勢や演出が不十分な場面あり、劇が舞台の中で納まる傾向が見られた。**例えば、テーブルを囲んで会話する場面が多く、テーブルの周辺で劇が小さく納まりがちになった。せつかく縁側を作り、庭も広くとったのだから、庭と居間、縁側と居間、縁側と庭、などと立ち位置を変え、お互いの距離をおけば、劇にも変化が生まれ、会話の声も大きくなり、身体表現も必要になって人物が生きてくるし（座っているだけでは表現が難しい）**劇が観客へ開くことになる。**

ラストシーンでは、おばあちゃんや九千坊に手を合わせて、老人ホームへ向かう。見送ってタケシも「僕は何もできんけど・・・せめて九千坊にお願いしたら、おばあちゃん・・・」と言って九千坊を拜む。劇の納まりもいし、人のよっては、感動し涙を流すかも知れない。これでいけないとは決していえない。劇を生かす力を与え、少しでも未来へのエネルギーの微光を放出させるためには、**情緒で納めず、課題を観客に投げかけたほうが劇も広がり面白いと思う。**

後記―劇評はあくまで洲浜の受け止め方、考えです。他の人の考えは違うかも知れません。あくまで参考にしてください。 2014.12.03 洲浜昌三

「訴えたいこと」を「届くもの」

全国（中国、島根）高校演劇協議会顧問

劇研「空」代表、日本劇作家協会会員

洲 浜 昌 三

三十七回中国地区大会は大田市で開かれ、発表会事務局を担当しました。片付けが終了したあと、部員たちを前にして言ったのを思い出します。「県大会ではくやし涙を流したけど、この二日間みんな汗を流してくれたので、いい大会になりました。ありがとう」

二十九年間演劇部を担当した最後の年でした。演劇を通して苦楽を共にした多くの部員たち、お世話になった多くの先生。少しでもご恩返しを、と思って引き受けた事務局でした。長年かっただけ荷物を肩から下ろした気持ちでした。見上げると満天の星でした。

次の春、演劇部の卒業生たちが、慰労会を開いてくれました。京都の大学でも演劇をしていた卒業生が、「先生、またやりましょう」と目を輝かして言いました。「もう、いいよ」と逃げるわけにはいきません。しかし社会人の劇団は大変です。劇をやりたい人がいない。いてもみな忙しい。場所もカネもない。劇団にせず、劇研「空」としました。広く演劇や言葉の問題に取り組む。これなら最後の一人になってもできる、と考えたからです。活動の目標に、こんなことを掲げています。「感動のある舞台の創造」「地域の歴史・文化の掘り起こしと再創造」「独自性と普遍性の追求」「高校演劇の応援」現在まで劇や朗読など様々な発表を36回、小中学校での指導、脚本提供などもしてきました。

文学や芸術には独自性、オリジナリティ、個性などが必要です。しかしそれはややもすると主観的、抽象的、独り善がりの狭い世界に落ち込みがちです。重要になるのは普遍性です。時代や場所、国、人種を越えて理解できる真実です。

感動的な作品は、この「二つのせめぎ合い」から生まれる気がします。地域の演劇や文学活動をしていても、常にそのことを思います。別な表現をすれば、「訴えたいこと」と、読者や観客の心に「届くもの」の距離や落差や濃淡です。広島県大会は八度目です。また個性のある多彩な舞台が観られるのが楽しみです。

（大会パンフレットより転載）

